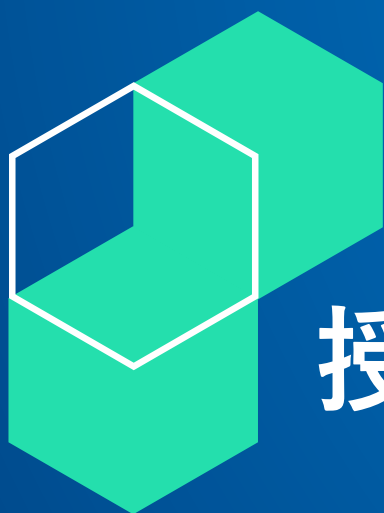




授業評価報告書

Course Evaluation Report



2023



鳴門教育大学
Naruto University of Education



高等教育機関である大学において、その教育の質を向上させることは重要な責務であり、その主要な部分を担っているのが他ならぬ授業である。したがって大学は授業の検証、省察、改善を不断に行っていくことによって、教育の質の向上を図って行かなければならない。

その際の貴重な資料となるものが、学生による授業評価アンケートである。本学では現在、教育実習・フィールドワーク・インターンシップ等の実習科目および卒業研究・課題研究・教育実践研究を除き、開講する全ての授業科目において学生の授業評価アンケートを実施している。

さて、今回の授業評価報告書2023からアンケートの手段、そして報告書の体裁が大きく変更された。2023（令和5）年度後期から新しい教務システムLiveCampusUが導入され、その中でアンケート回答が可能になった。また前（令和4）年度までは学士課程、修士課程、専門職学位課程それぞれが別々に報告書を作成し、その総頁数が800頁にまで上るものだったが、それらを一元化し、また個々の授業のアンケート結果の掲載を省くことで総頁数を23頁までに縮減した。このように一つの報告書にまとめることで、課程を横断したアンケート結果・分析の比較が容易になっている。さらに専門職学位課程では〈通学〉と〈遠隔〉とに分けて分析を行っている。なお以前報告書に掲載されていた個々の授業評価アンケートの結果は、授業を担当した教員が上述のLiveCampusU上で閲覧し、必要に応じてコメントを記入する形に変更された。

上記のような変更には理由がある。平成12年度に始まった授業評価アンケートは、FD推進事業の一環として個々の教員の授業改善に資するのが目的であった。しかし今回、社会（認証評価等）から求められる内部質保証、すなわち大学における組織的な教育改善に資する教学IRの一環となるべく、アンケートの目的が改められた。現在本学は学士課程、専門職学位課程におけるカリキュラムの改革に取り組んでおり、大きな過渡期にある。本報告書が本学の教育改善の一助となれば幸いである。

2024（令和6）年度 学校教育学部教務委員会及び大学院学校教育研究科教務委員会
学生による授業評価専門部会 主査 山田 啓明



はしがき	・・・・・・・・	1
目次	・・・・・・・・	2
2023（令和5）年度授業評価の集計結果（概要）	・・・・・・・・	3
1.学士課程	[01] 授業の計画と内容について	4
	[02] 授業の進め方について	5
	[03] 令和5年度新設3科目群について	6
	[04] 授業への取り組み・満足度について	7
2.修士課程	[01] 授業の計画と内容について	8
	[02] 授業の進め方について	9
	[03] 授業への取り組み・満足度について	10
3.専門職学位課程＜通学＞	[01] 授業の計画と内容について	11
	[02] 授業の進め方について	12
	[03] 授業への取り組み・満足度について	13
4.専門職学位課程＜遠隔＞	[01] 授業の計画と内容について	14
	[02] 授業の進め方について	15
	[03] 授業への取り組み・満足度について	16
参考資料	[01] 授業評価前年度（令和4年度）データ	17
	[02] 授業評価実施要領	18
	[03] 授業評価報告書の作成体制	19
	[04] 授業評価報告書の作成スケジュール	20



1. 2023（令和5）年度授業評価の集計結果（概要）



課程	授業科目数（授業評価実施対象のみ）  =100科目	回答率（延べ回答者数／延べ受講者数）  =1,000人
----	---	---

学士課程

424科目



43%（4,320人／10,162人）



修士課程

74科目



78%（1,183人／1,510人）



専門職学位課程（通学）

135科目



64%（1,440人／2,267人）



専門職学位課程（遠隔）

49科目



38%（268人／702人）

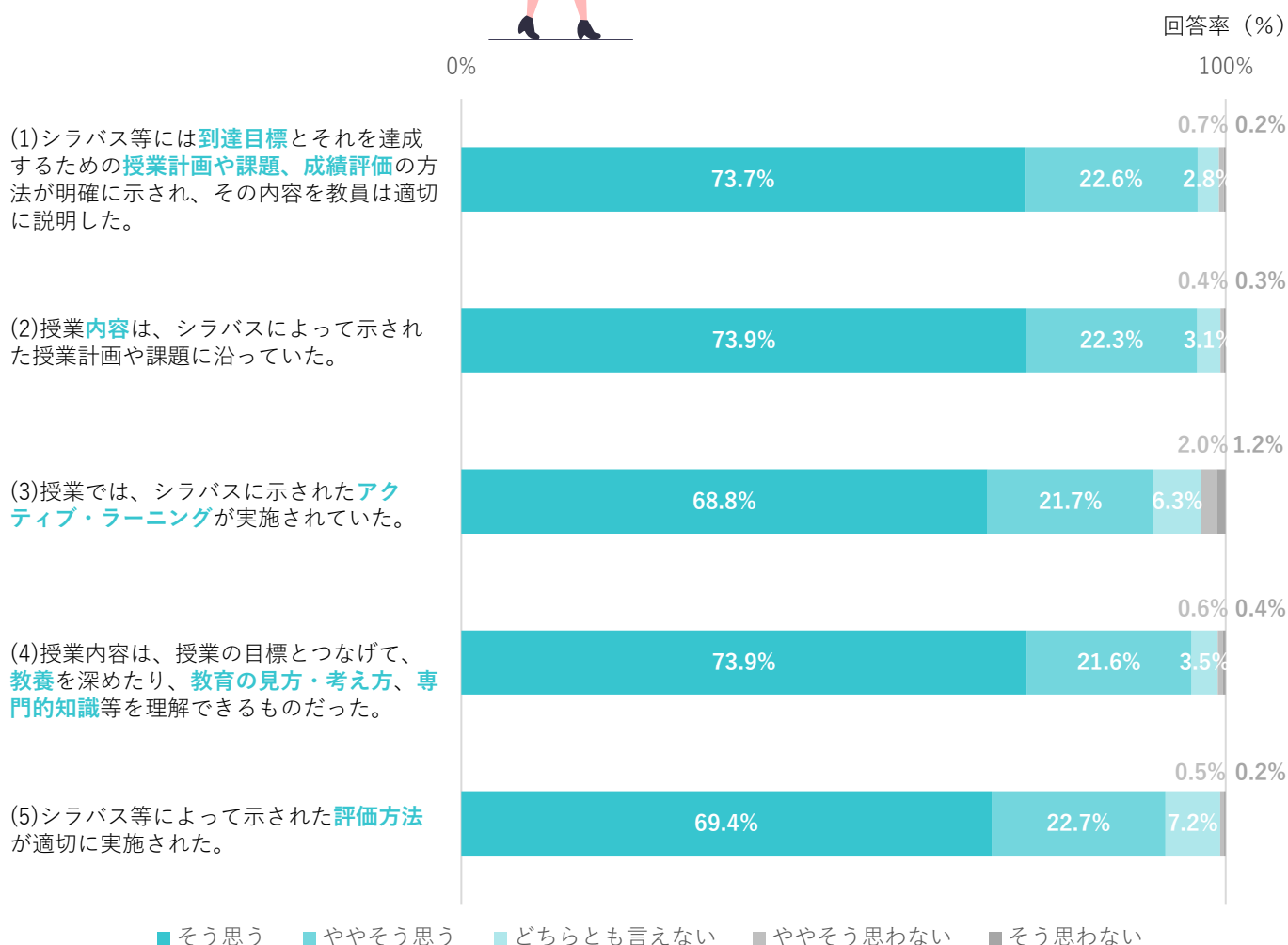


2023（令和5）年度後期から、新しい教務システム（「Live Campus U」）上の授業評価アンケートメニューを活用することで、授業評価アンケートに学生が取り組みやすくすることを通して、回答率の向上を図った。

その結果として、全体としては、オンラインでのアンケートとしてはかなり順調な回答率を達成したといえる。一方、学生の母数が増えるほど回収率が下がる傾向にある。これは、教員からの要請が隅々まで届きにくいことや、教員と学生、学生同士による声かけのし辛さなどが原因として考えられる。また、学生の自主性への依存度が高い遠隔課程の回答率が低く、現状の取り組みの課題あるいは限界が認められる。

とはいえ、重要なのは全体としての回答率よりも、各講義の実情が正しく把握され得るか、という点である。この視点に立つと、いずれの課程も授業科目によって回答率に大きな違いがあることが真に重要な課題である。回答率の高い講義をロールモデルとし、各講義の実情がより積極的に把握されるようなアンケートの設計と、その実施方法の検討が求められる。

[01] 授業の計画と内容について

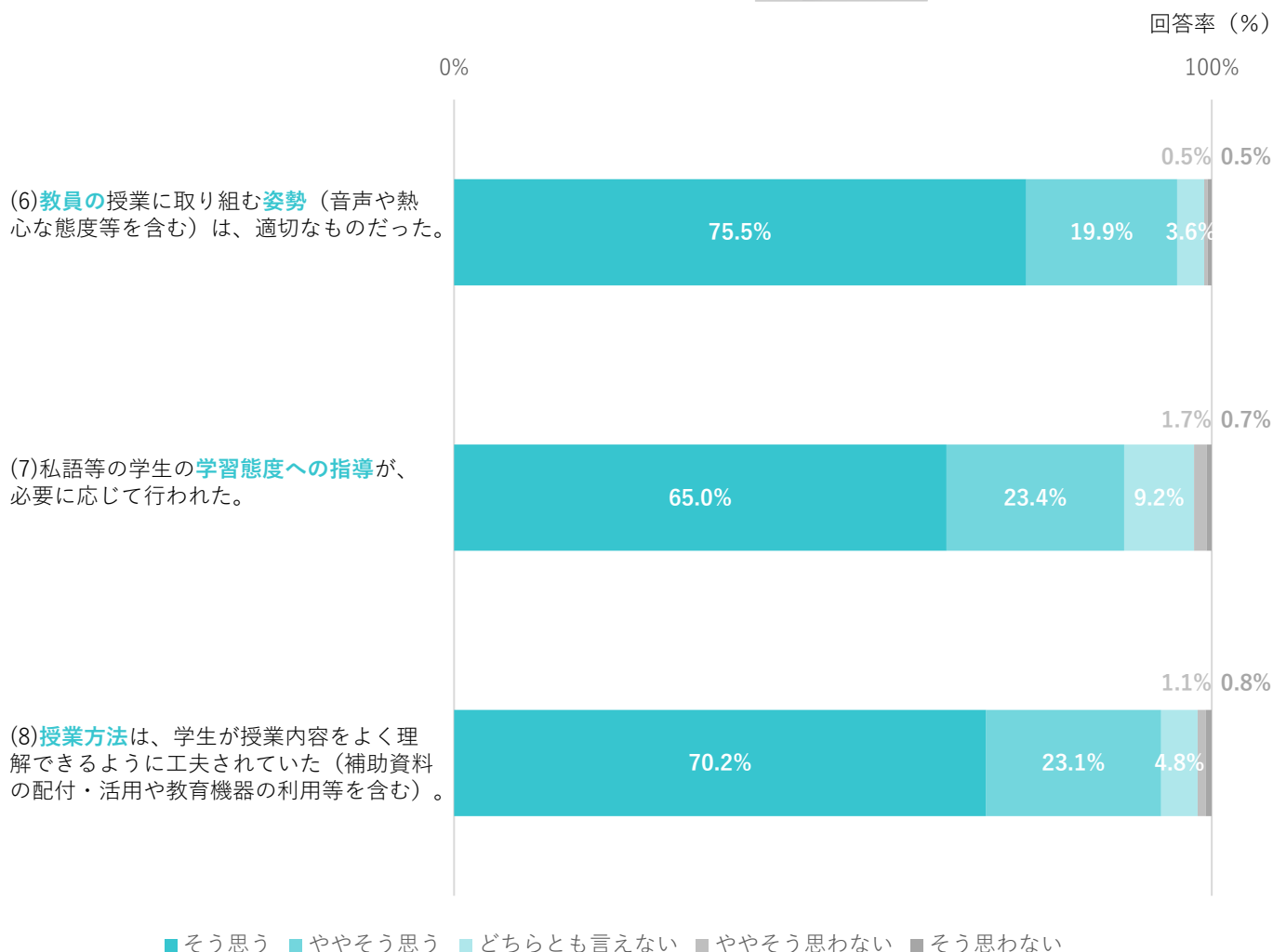
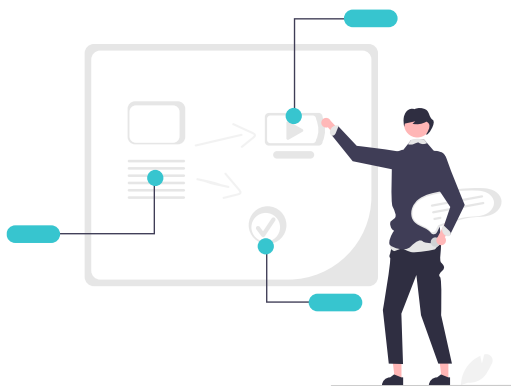


本項目群では、**全ての設問**において**非ネガティブ回答**（そう思う、ややそう思う、どちらとも言えない）の割合が 96 % を超える結果となった。とりわけ、(1)99.1 %、(2)99.3 %、(4)99.0 %、(5)99.3 % の非ネガティブ回答から、授業科目の内容がシラバスに準拠して体系的であることが示唆される。

一方で、**(3)**についてはその他の項目の平均値には届かない結果となった。考えられる要因としては、実際に**アクティブ・ラーニング**が実施されていなかったと解釈できるほか、アクティブ・ラーニングがこういったものなのか回答者が理解できていないという可能性も否定できない。

他方で、**(5)**で「そう思う」 69.4 %は、(1)(2)(4)と比較してやや劣る結果となっている。同時に、「どちらとも言えない」回答率は 7.2 %と項目群中で最も高い。(1)の結果から、回答者の 99.1 % は**成績評価**方法がシラバスに明文化されていることを否定していないため、(5)の結果は、実際に適用された評価方法の「適切さ」を精度よく表している指標と考えられる。

[02] 授業の進め方について



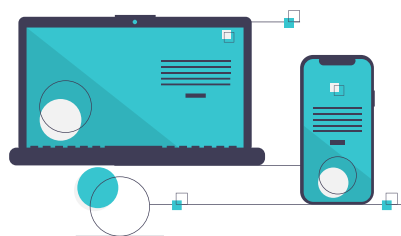
本項目群では、**全ての設問**において**非ネガティブ回答**（そう思う、ややそう思う、どちらとも言えない）の割合が97%を超える結果となった。

まず、**(8)**の非ネガティブ回答が98.1%であることから、回答者の98.1%にとって**授業方法**の水準が相応なものであったことは否定できない。他方で、**(6)**から回答者の99.0%が**教員の授業姿勢**は不適切ではないと評価しており、回答者の95.4%にいたっては適切な姿勢であると評価している。この結果は、本学の学位授与方針ならびに教育課程方針に則した、適切な授業形態の実現に寄与するものと考えられる。

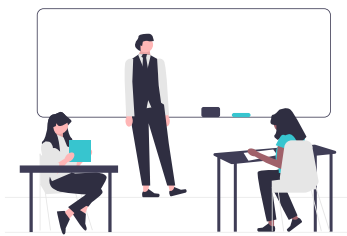
また、**(7)**では「どちらとも言えない」と評価した回答者は9.2%で項目群中で最も高い値となった。この結果の背景には、**授業方法の多様化**による影響が考えられる。旧来型の座学中心の授業方法に代わり、反転学習やディベート、グループワークが広く用いられることとなったため、項目(7)については、**指導の必要性**について教師と回答者の間で認識の齟齬が生じている可能性がある。

[03] 令和5年度新設3科目群について

ICT活用指導力育成科目群



現代的教育課題対応コア科目群



初年次教育科目群



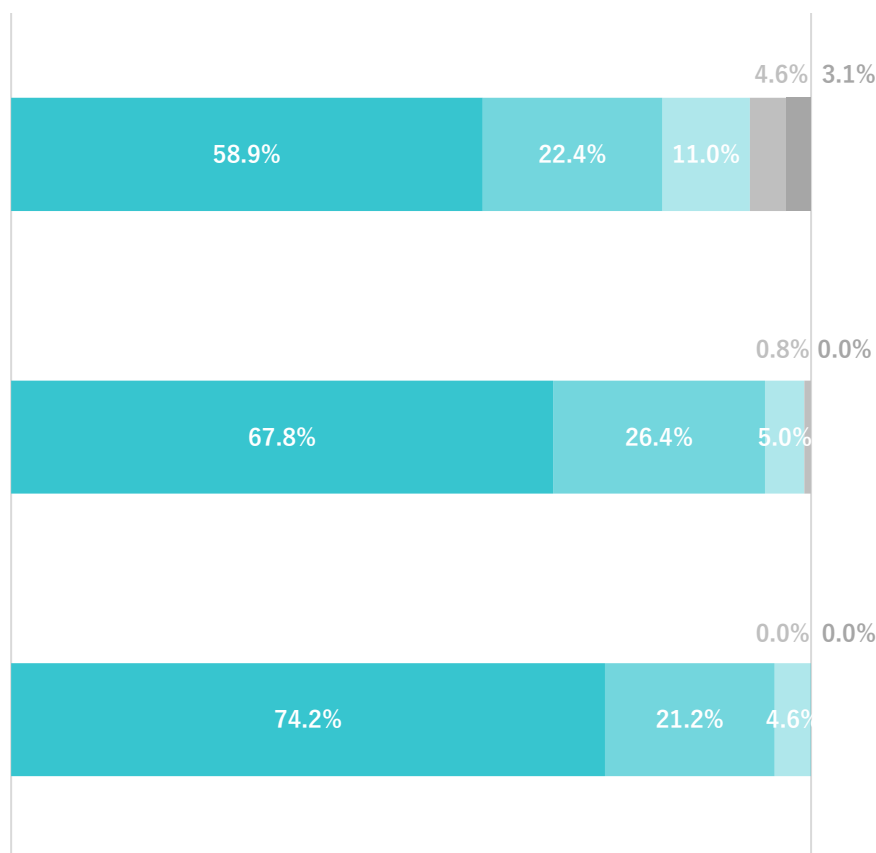
回答率 (%)

0%

100%

(9) ICT活用指導力育成科目群：

今日の学校教育を踏まえ、教員に求められる情報通信技術（ICT）活用指導力を学ぶことができる授業内容だった。



■ そう思う ■ ややそう思う ■ どちらとも言えない ■ ややそう思わない ■ そう思わない

特筆すべき点として、設問 (11) では、非ネガティブ回答（そう思う、ややそう思う、どちらとも言えない）が回答者全体の 100 % を占めている。この結果から、**初年次教育科目群**によって生じる教育的な効果は否定できない。ただし、設問 (11) の問いは包括的であり、鳴教大生としての学修の基礎が「全て」身についたのかどうかを判定できるものとはなっていない点に注意が必要である。回答データの解像度を向上させるためには、問いの解像度を高める必要がある。

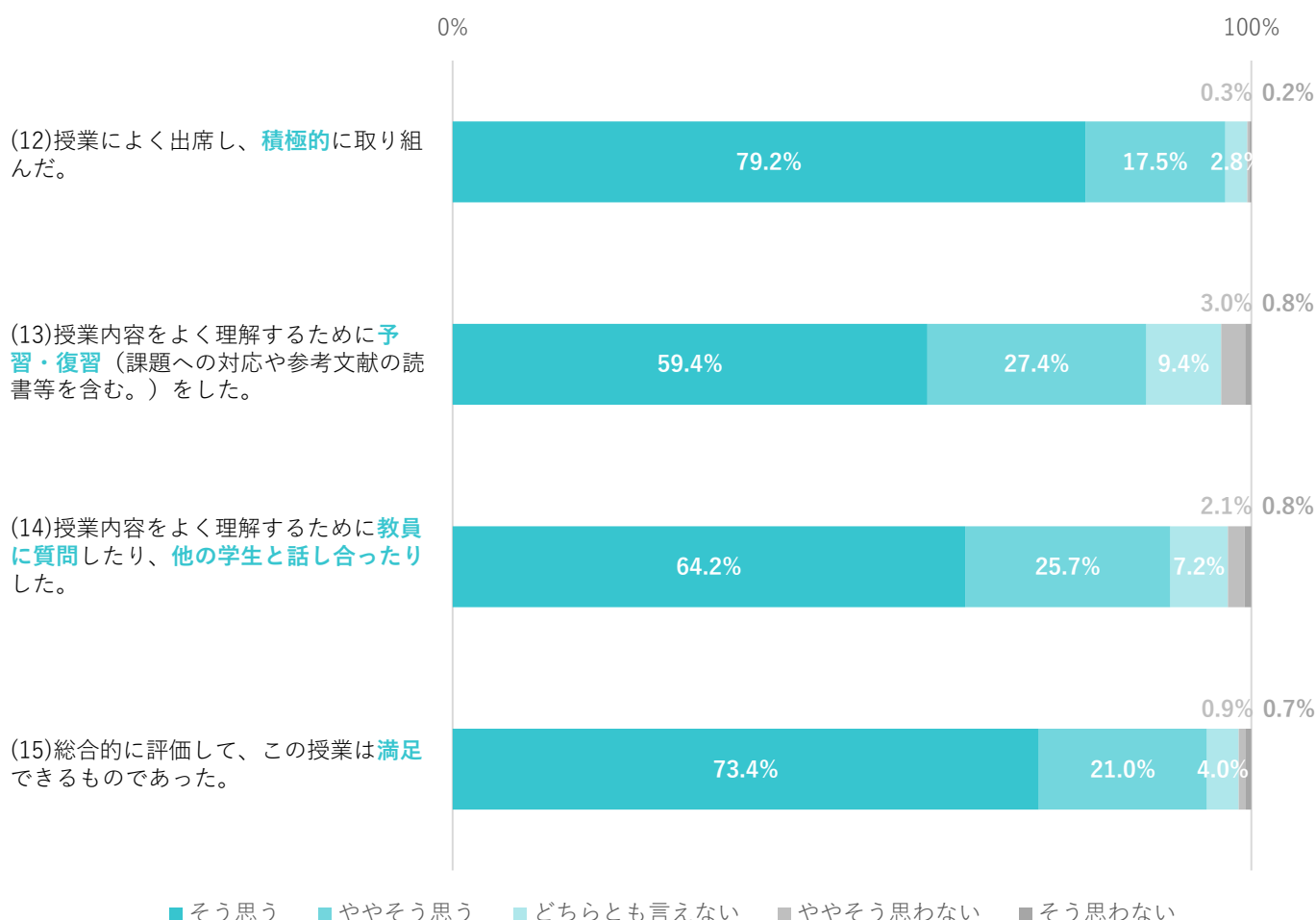
次に、設問 (10) では、非ネガティブ回答が 99.2 % を占めている。この結果から、**現代的教育課題対応コア科目群**についても、設問 (11) と同水準の教育効果が示唆される。

一方で、設問 (9) **ICT活用指導力育成科目群**については、ネガティブ回答の割合が 7.7 % となり、学士課程向けのアンケート回答の中でも群を抜いて高い値となっている。考えられる要因としては、学習内容の難易度が高すぎる（あるいは低すぎる）、または「教員に求められるICT活用指導力」について教師と回答者の間で認識の齟齬がある、などが挙げられる。

[04] 授業への取り組み・満足度について



回答率（％）



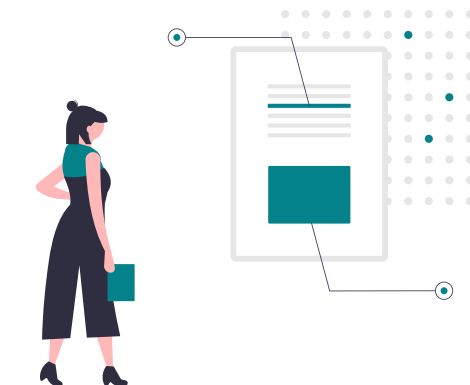
本項目群では、**全ての設問**において非ネガティブ回答（そう思う、ややそう思う、どちらとも言えない）の割合が 96 % を超える結果となった。ただし、本項目群は回答者が自身の取り組みについて評価している点、すなわち自己評価である点に注意する必要がある。

まず、設問 **(12)** の結果から、96.7 % の回答者が**積極的**に授業に取り組んだと考えていることがわかる。この結果は、授業が適切な水準で実施され、適切な授業形態が採用されていることを裏付ける数値と解釈できる。

次に、設問 **(13)** では、13.2 % の回答者が授業の**予習・復習**について非ポジティブな評価を示しており、本項目群の中では最も高い値となった。この値は「授業で採用されている学習指導法（授業で指定されている予習・復習の方法）の適切さ」に影響を受けて変動するものと考えられる。

他方で、設問 **(14)** および **(15)** では、非ネガティブ回答がそれぞれ 97.1 % および 98.4 % を占めている。この値は、回答者の**学習環境（授業の形態）**が回答者にとって適切なものであったかをよく表す指標となっている。

[01] 授業の計画と内容について

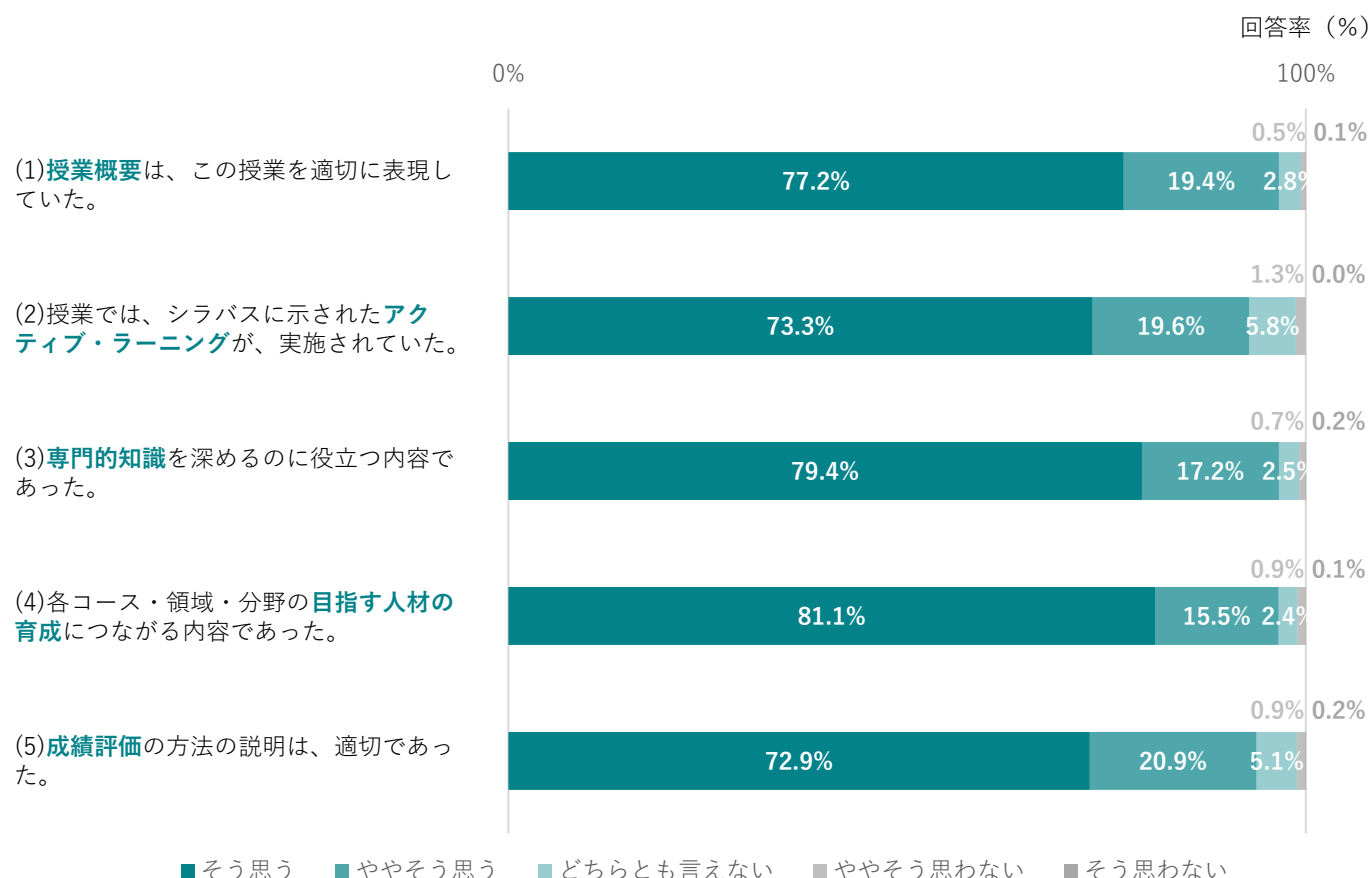


(1)～(11)全ての質問項目において、「そう思う」(強い肯定的回答)と「ややそう思う」(やや肯定的な回答)を加えた、肯定的な回答が90%以上(92.9～96.7%)を占めていたが、そのうち「そう思う」(強い肯定的回答)は7割程度(72.0～81.1%)であった。

また前年度と比較すると、肯定的な回答(「そう思う」+「ややそう思う」)は11項目中10項目において減少し(下げ幅は0.2～2.2ポイント)、「そう思う」(強い肯定的回答)が全ての質問項目において減少していた(下げ幅は0.8～8.0%ポイント)。

以上から、修士課程においては、総じて授業に対し肯定的な評価が得られているものの、「そう思う」(強い肯定的回答)と評価した者の割合が前年度より低下したことについて分析と対応を行う必要がある。

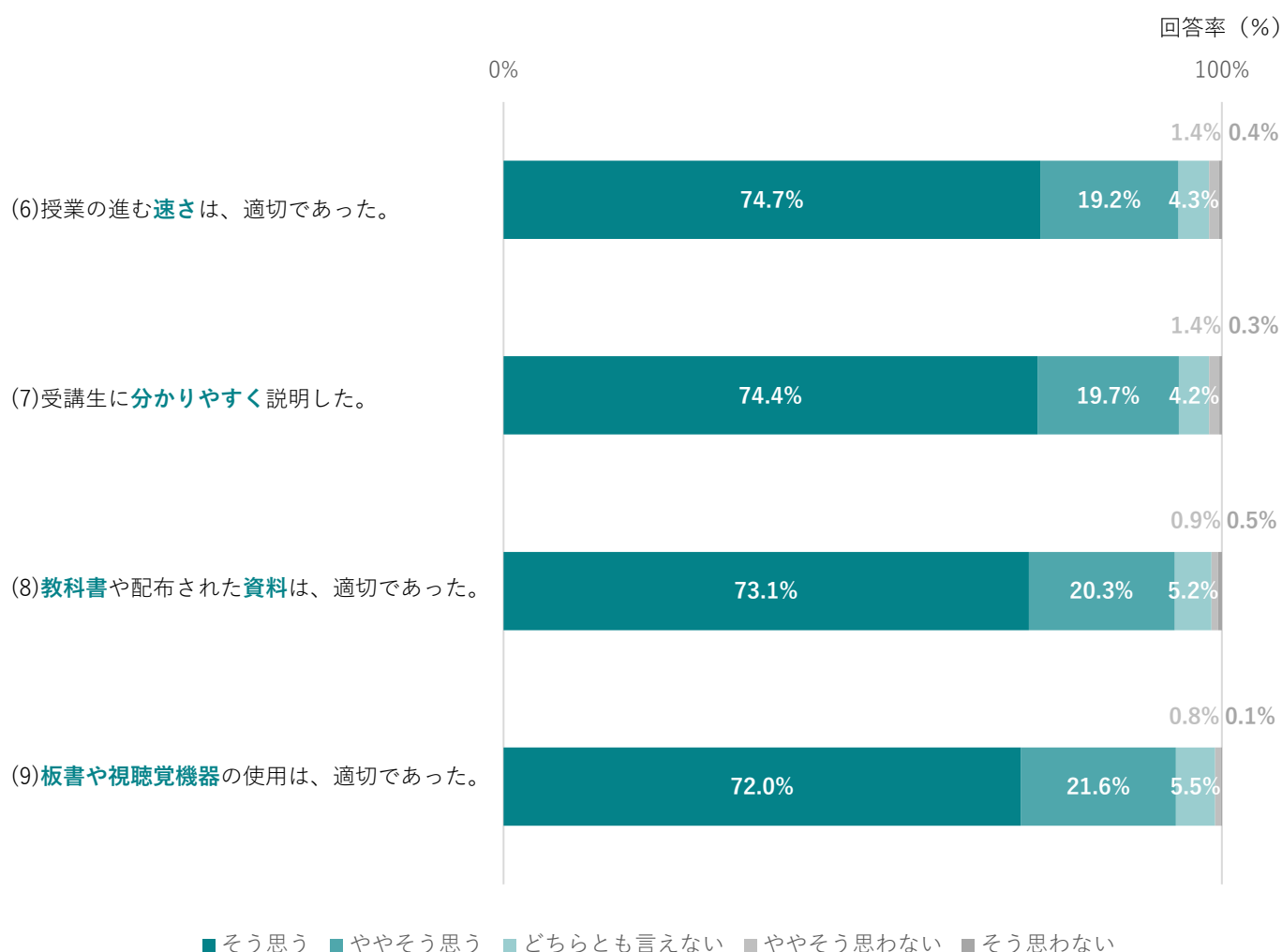
以下、前年度より「そう思う」(強い肯定的回答)とする回答の下げ幅が顕著だった質問項目を確認し、授業改善の要点を考えていくことにする。



設問(1)(5)の2項目で「そう思う」(強い肯定的回答)の前年度比下げ幅が△6.0ポイントを上回っていた。

よって提示する授業計画と授業内容を十分合致させるため、教員個人の努力に任せるのではなく大学としてシラバスの記載や成績評価の説明のポイントをわかりやすく提示し、チェックリストを利用するなど何らかの方策を講じる必要がある。

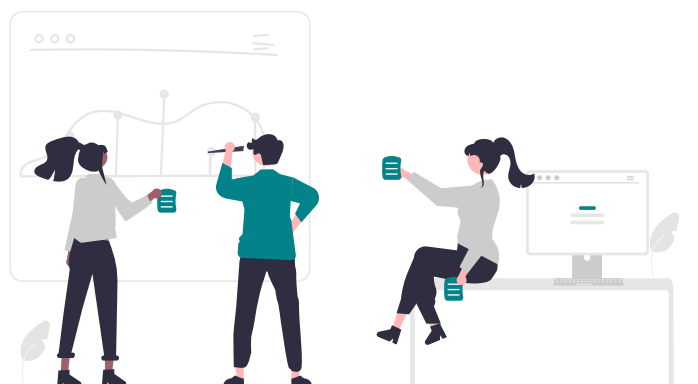
[02] 授業の進め方について



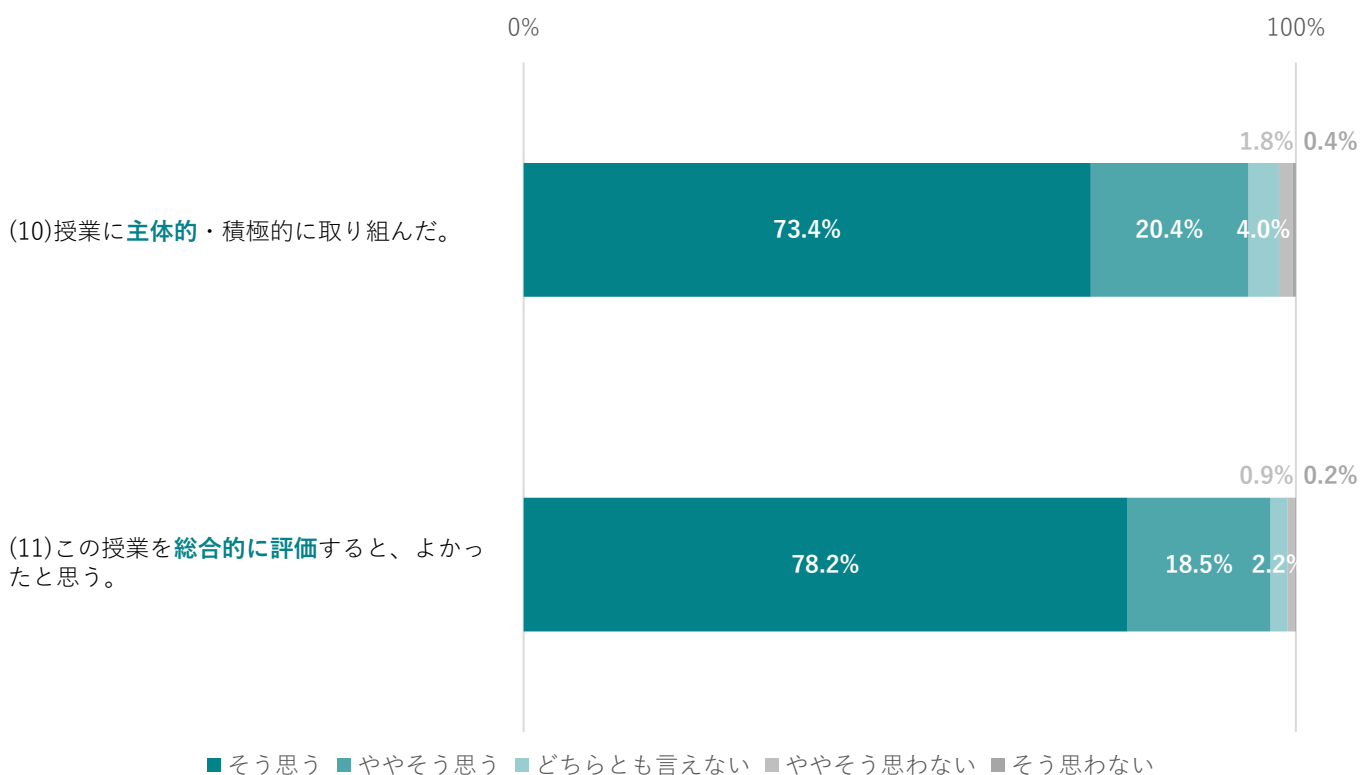
設問(8)(9)の2項目で、「そう思う」（強い肯定的回答）の前年度比下げ幅が顕著であった（(8)△5.5ポイント、(9)△8.0ポイント）。

折しも2024（令和6）年度に共通講義B棟が改修され、より充実した教育環境の整備が計画されており、改修後の**講義室の機器**の使用について教員が十分習熟する機会を設ける、また**教科書や配布資料**についても紙ベースから電子媒体への移行も含めポリシーを策定するなど、大学として授業の進め方について改善を図る好機と捉えたい。

[03] 授業への取り組み・満足度について



回答率（％）

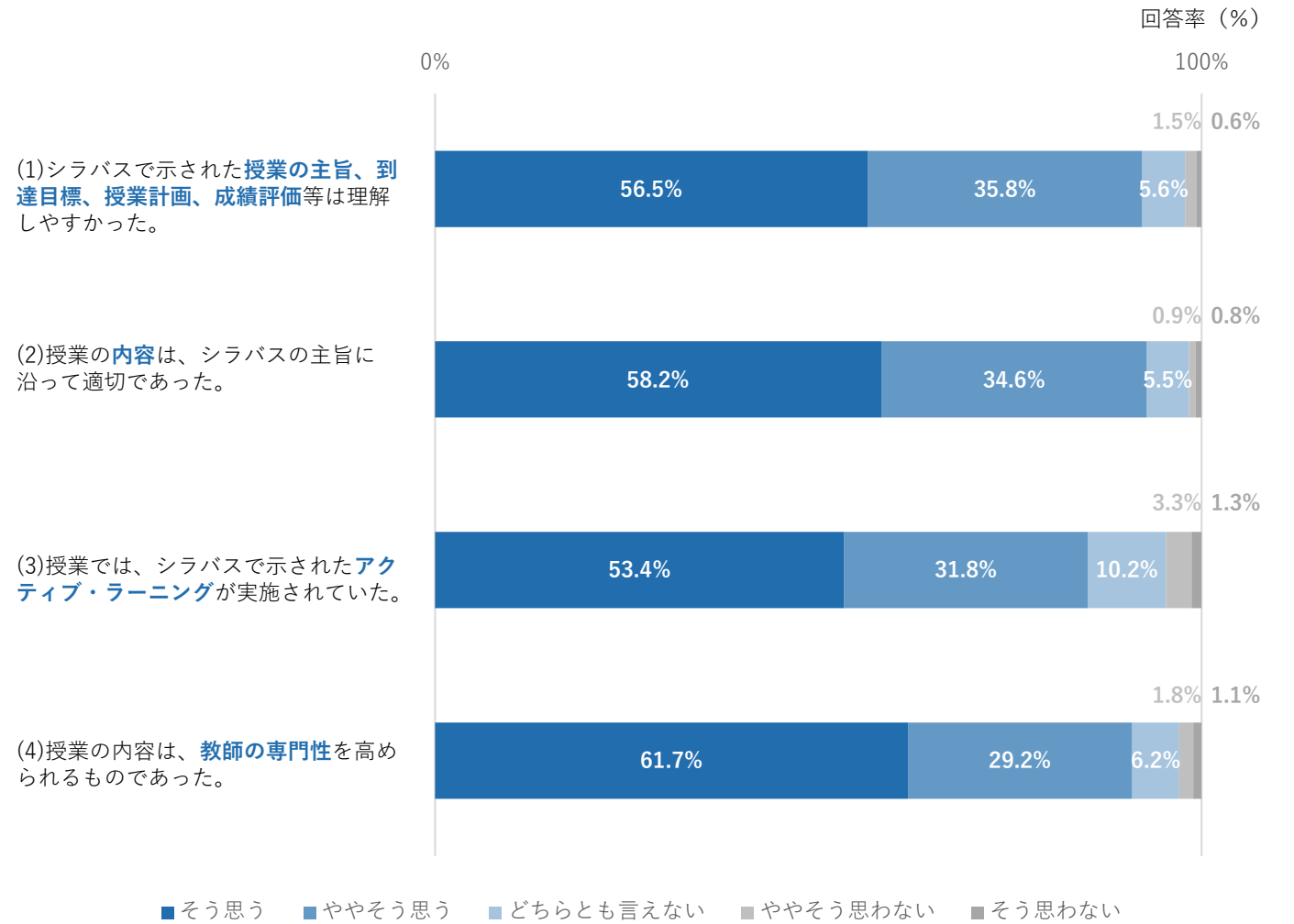
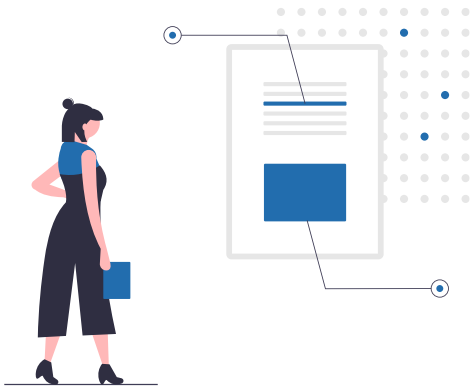


設問(10)(11)の2項目については、「そう思う」（強い肯定的回答）の前年度比下げ幅がそれぞれ(10)△5.0ポイント、(11)△6.2ポイントであった。

設問(10)では、学生の意欲や動機づけが率直に反映されており、もし教員が単純に学生へ積極的な取り組みを指示してしまえば、学生の「主体的」な取り組みとはそもそも矛盾してしまう。**学習者の意欲や動機づけ**を向上させる方策として合理的かつ根拠のある方法について、大学が理論や実践のノウハウを集約したデータベースを構築し、各教員がそれを参照して改善を検討・実践することなども長期的には整備する必要があるだろう。

設問(11)は他の全項目も含めた**総合的な評価**であり、これまでに検討・指摘した項目ごとの改善策が機能することの帰結としてどの程度向上するのかを注視したい。授業改善については、従来ともすれば大学教員の個々の努力に期待することが多かったが、今後は大学としての包括的な取り組みや、システムを実効的に運用する発想が必要だろう。

[01] 授業の計画と内容について



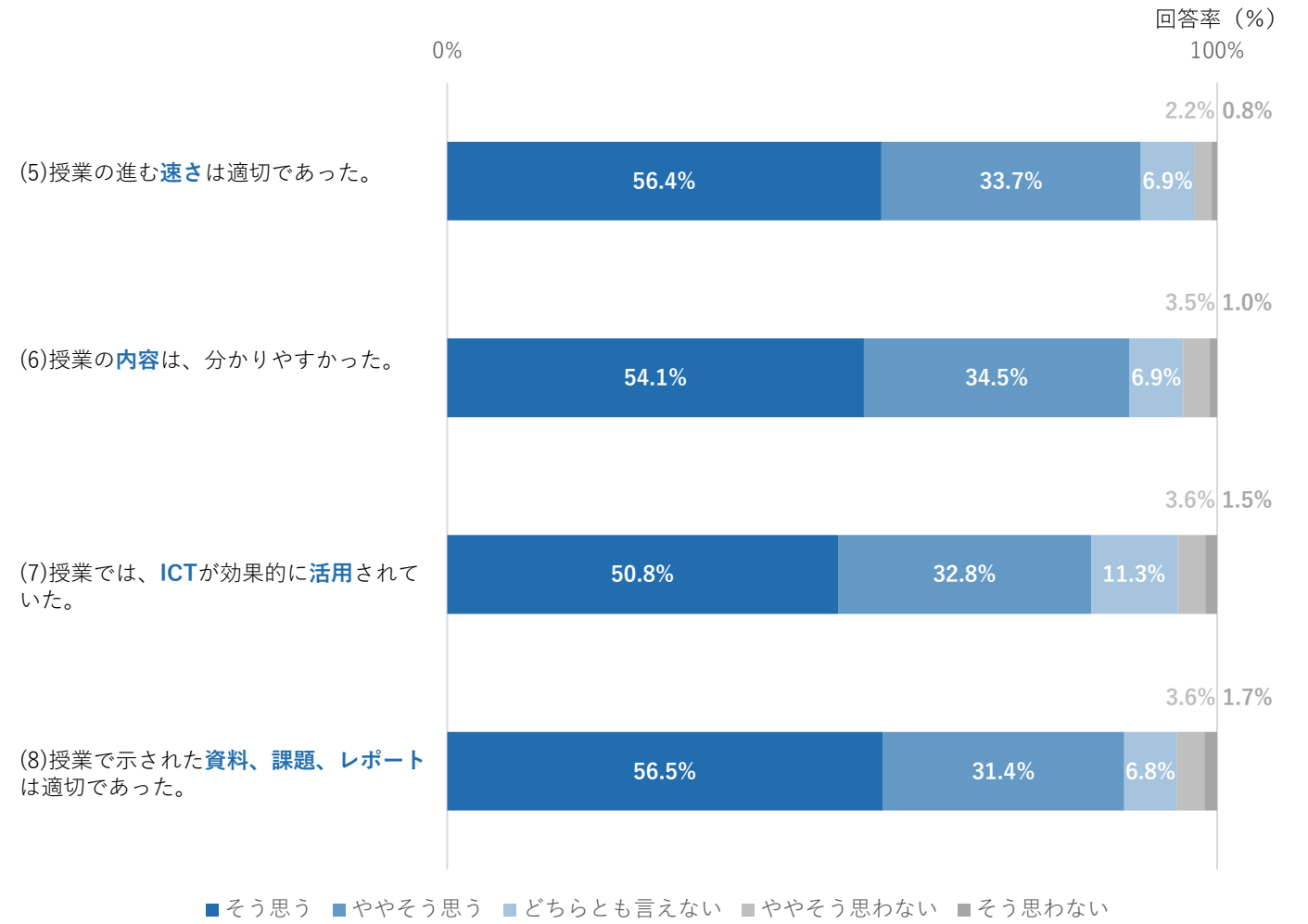
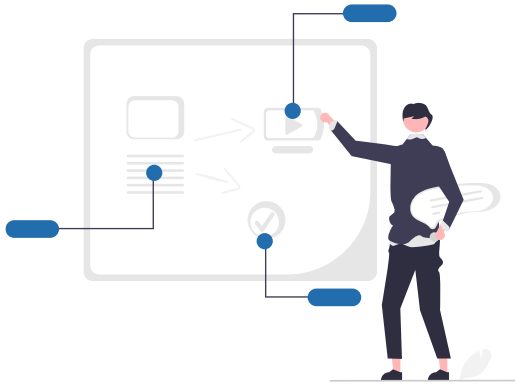
設問(1)～(11)について、前年度に比べ、「**そう思う**」（強い肯定的回答）が約6～13ポイント減少し、「**どちらとも言えない**」及び否定的回答は(7)以外の全設問において増加している。（設問(7)の「**どちらとも言えない**」及び否定的回答の割合は、前年度と同じであった。）

これらのことから、専門職学位課程＜通学＞では、前年度に比べ、全質問項目についての授業の質が悪化したと考えられる。

設問(3)は、修士課程の設問(2)とほぼ同内容であるが、修士課程に比べ、「**そう思う**」（強い肯定的回答）は約20ポイントも少なく、「**どちらとも言えない**」及び否定的回答は7.7%も多い。このことから、専門職学位課程（通学）の授業において、シラバスで示された**アクティブラーニング**をより実施していくことは課題だと言える。

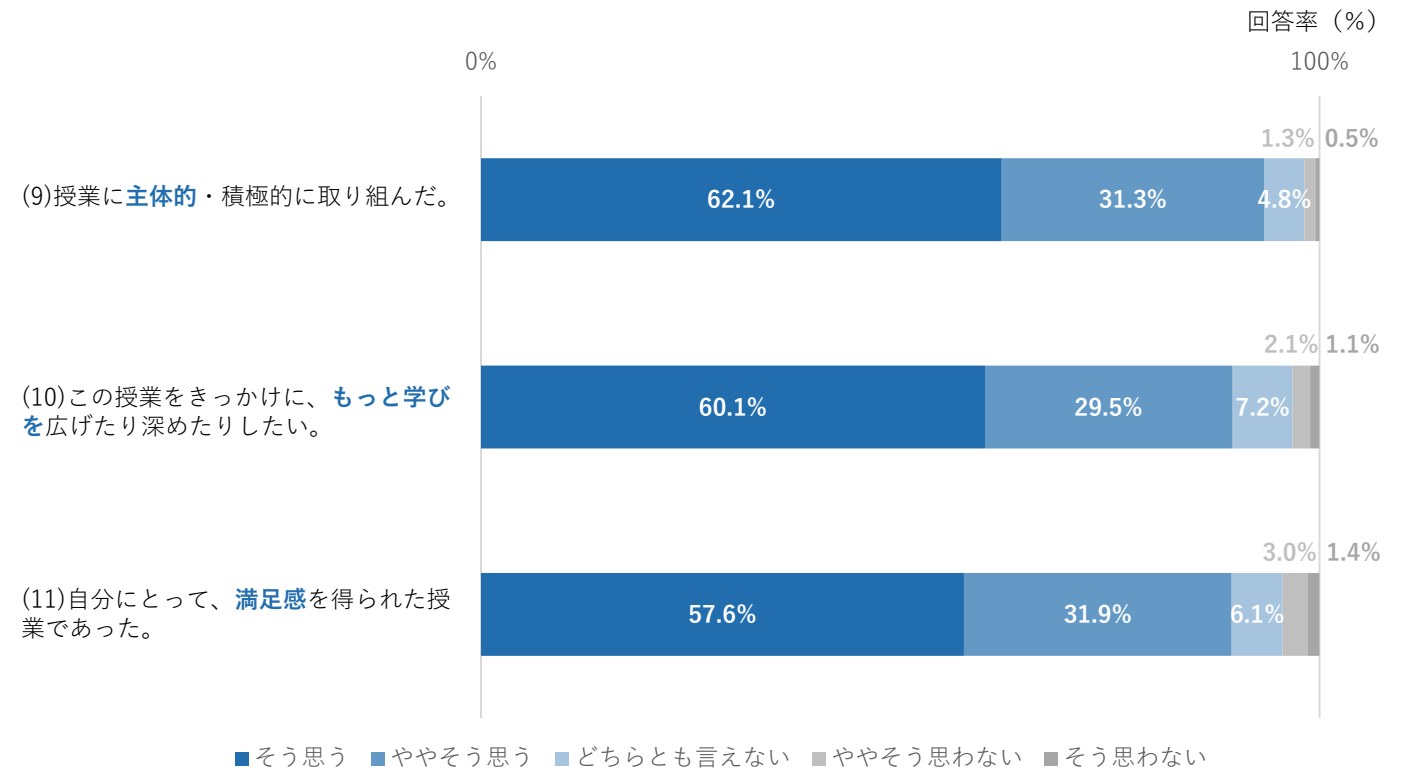
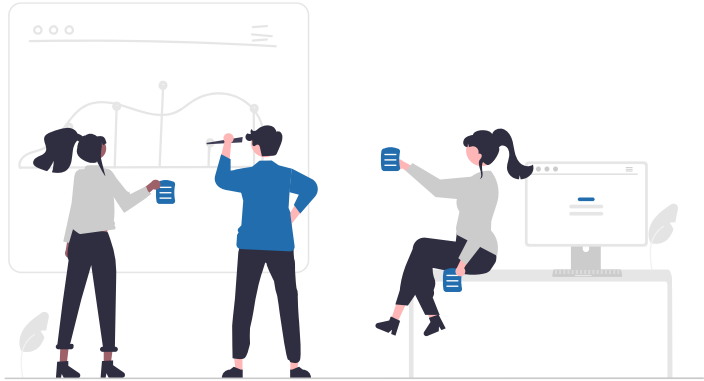
設問(4)は、修士課程の設問(3)と内容が似ているが、修士課程に比べ、「**そう思う**」（強い肯定的回答）は約18ポイントも少なく、「**どちらとも言えない**」及び否定的回答は5.7ポイントも多い。このことから専門職学位課程（通学）の授業において、より**教師の専門性**を高めることができる授業にしていけることも課題だと言える。

[02] 授業の進め方について



設問(5)は、修士課程の設問(6)と同内容であるが、修士課程に比べ「そう思う」（強い肯定的回答）は約18ポイントも少なく、「どちらとも言えない」および否定的回答は3.8ポイントも多い。このことから、専門職学位課程＜通学＞の授業において、より**適切な早さ**で授業を実施していくことも課題だと言える。

[03] 授業への取り組み・満足度について



設問(9)は、修士課程の設問(10)と同内容であるが、修士課程に比べ「思う」（強い肯定的回答）は約11ポイントも少なく、「どちらとも言えない」および否定的回答は0.2ポイント多い。このことから専門職学位課程＜通学＞の授業において、より授業に**主体的**・積極的に取り組めるような授業にしていくことは課題だと言える。

以上、設問(1)～(11)の結果から、専門職学位課程（通学）では、授業改善が喫緊の課題であると言える。この課題を解決するためには、従来のように、本学における個々の大学教員の努力に期待するのでは十分ではないと考える。本学は、大学として、この課題を解決するための仕組みを整備する必要があると考える。

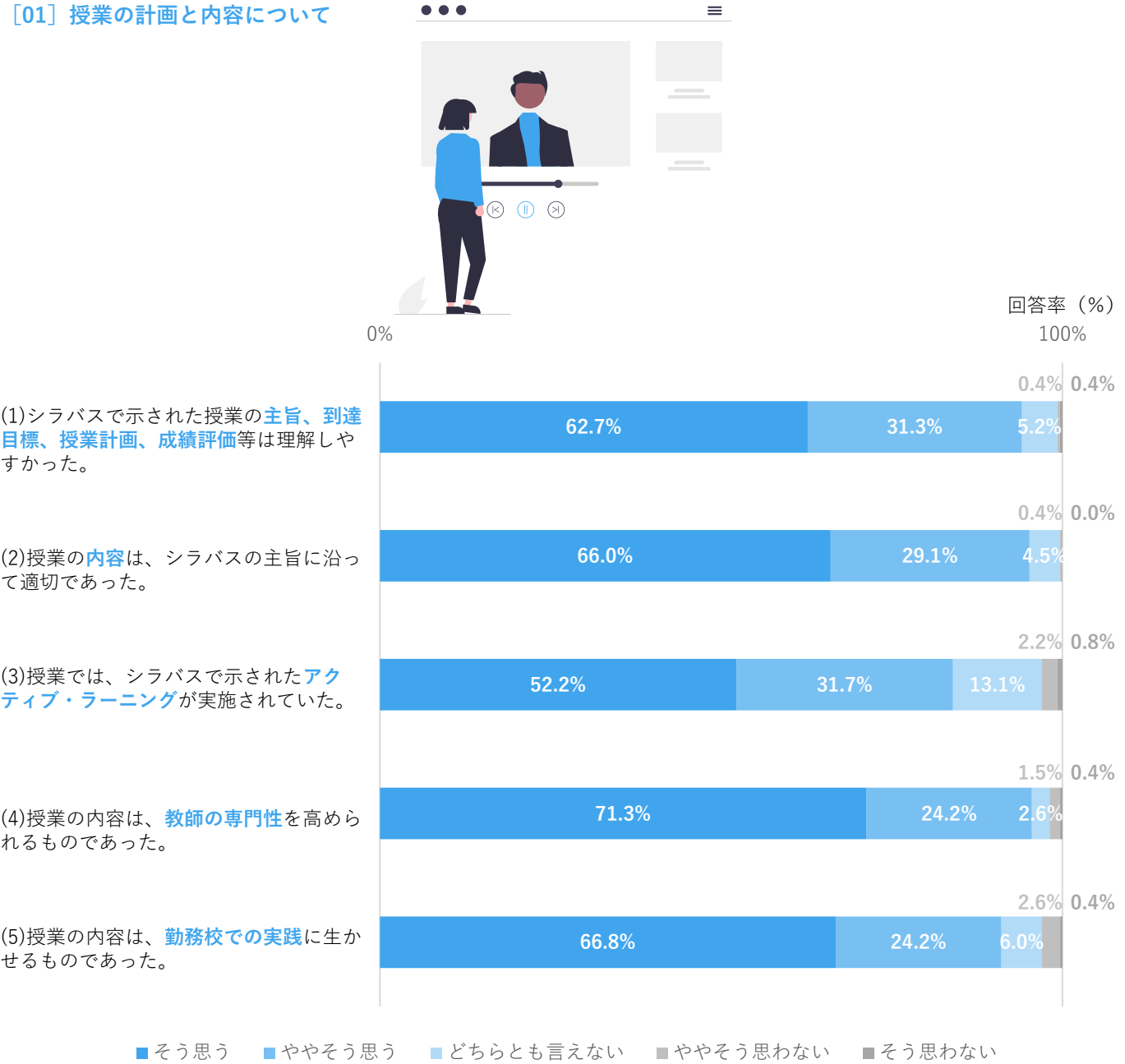
設問(1)～(12)のうち10項目（(3)と(12)以外）において、前年度に比べ肯定的な回答（「思う」「やや思う」）が、若干減少する（△0.1～△4.4ポイント）結果となった。設問(3)は+2.1ポイント、設問(12)は+0.2ポイント上方に改善された。<遠隔>と<通学>は11/12設問が同様の内容であり、<遠隔>と<通学>では同じシラバスで授業を実施しているが、11設問のうち9設問において、<遠隔>の方が「思う」（強い肯定的回答）の回答率が上回る結果となった。

また、回答数が前年度比2倍以上（R4：110件→R5：268件）となっており、より全体を捉える調査結果となったと考えられる。

以上のように回答数増加による回答率の誤差や<通学>との比較を加味すると、<遠隔>は、全設問において前年度と同等程度に学生からの高い評価が得られたと評価できる。

以下、「思う」（強い肯定的回答）の変化に着目し、授業改善の要点を考えていくことにする。

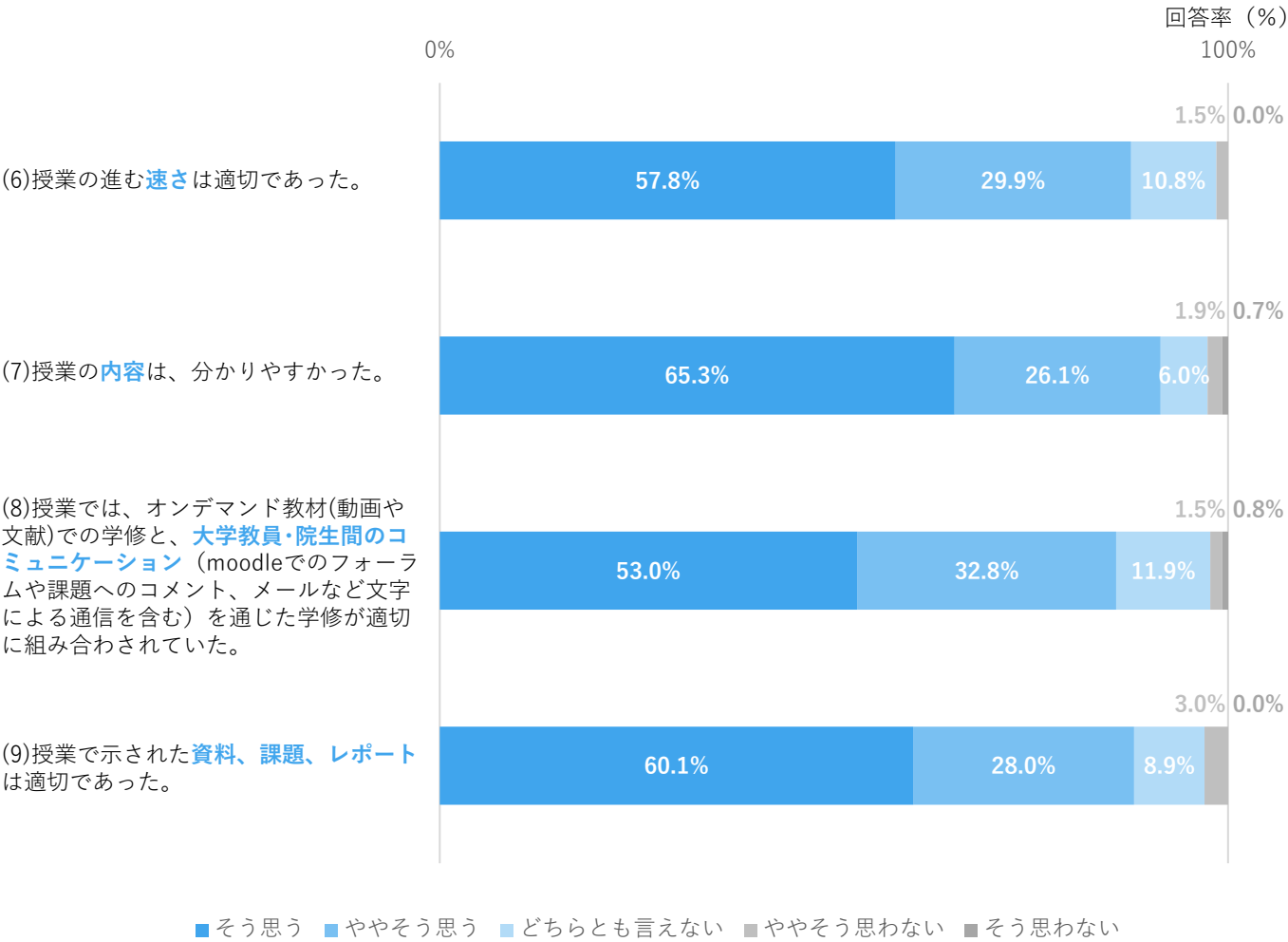
[01] 授業の計画と内容について



「思う」（強い肯定的回答）とする回答率が高い項目は、設問(4)71.3%、(5)66.8%であった。

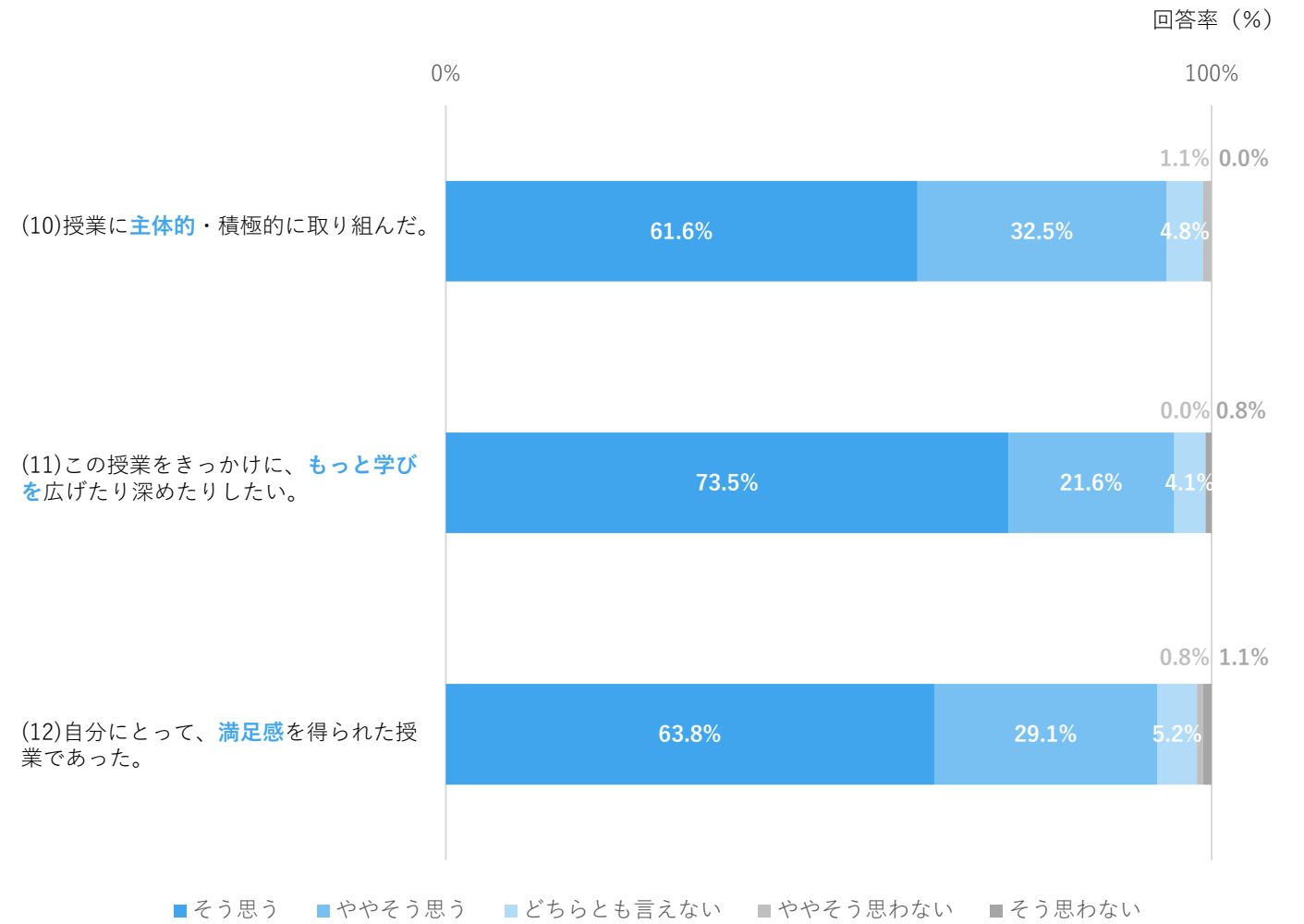
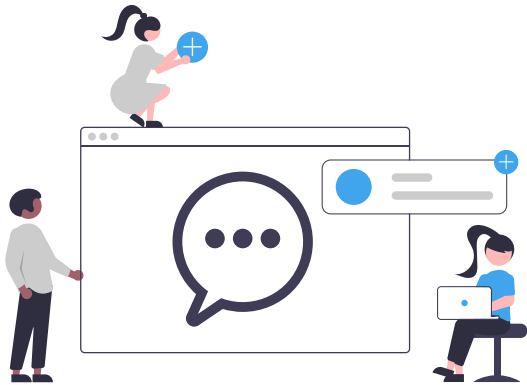
設問(3)は、「思う」（強い肯定的回答）が低いものの、前年度より大きく改善されている(前年度比+4.9ポイント)。<遠隔>の授業は、ZOOMなどによるオンライン（同時双方向）だけではなく、オンデマンド（録画）の授業回もある。そのような中で、**アクティブ・ラーニング**を実施するためには、授業の工夫が必要である。また各授業で、この授業のどのような学びの進め方が**アクティブ・ラーニング**に該当するのかを、授業者がしっかりと院生に伝えることも必要であろう。

[02] 授業の進め方について



設問(8)は、「思う」(強い肯定的回答)が53.0%(前年度比△7.9ポイント)と低かった。
オンデマンド教材での学修と、**大学教員・院生間のコミュニケーション**を通じた学修の組み合わせの適切性について質問しており、専門職学位課程＜遠隔＞の学びの質を顕著に表した重要な設問の一つと言える。オンデマンド教材での学修と大学教員・院生間のコミュニケーションを通じた学修の組み合わせについては、授業改善が必要である。＜遠隔＞院生の多くは、平日の本務校での勤務を終え、夜間や休日にオンデマンド(録画)授業の課題に取り組んだり、ZOOMやteamsでのオンライン(同時双方向)授業に参加している。したがって、オンデマンド教材での学修と、大学教員・院生間のコミュニケーションを通じた学修の組み合わせの適切さについても、院生の勤務状況による個人差が大きいことが予想される。授業改善としては、受講院生の希望や取組状況を個別にモニタリングし、授業期間内に授業スタイルを見直し、進めていくことが重要である。

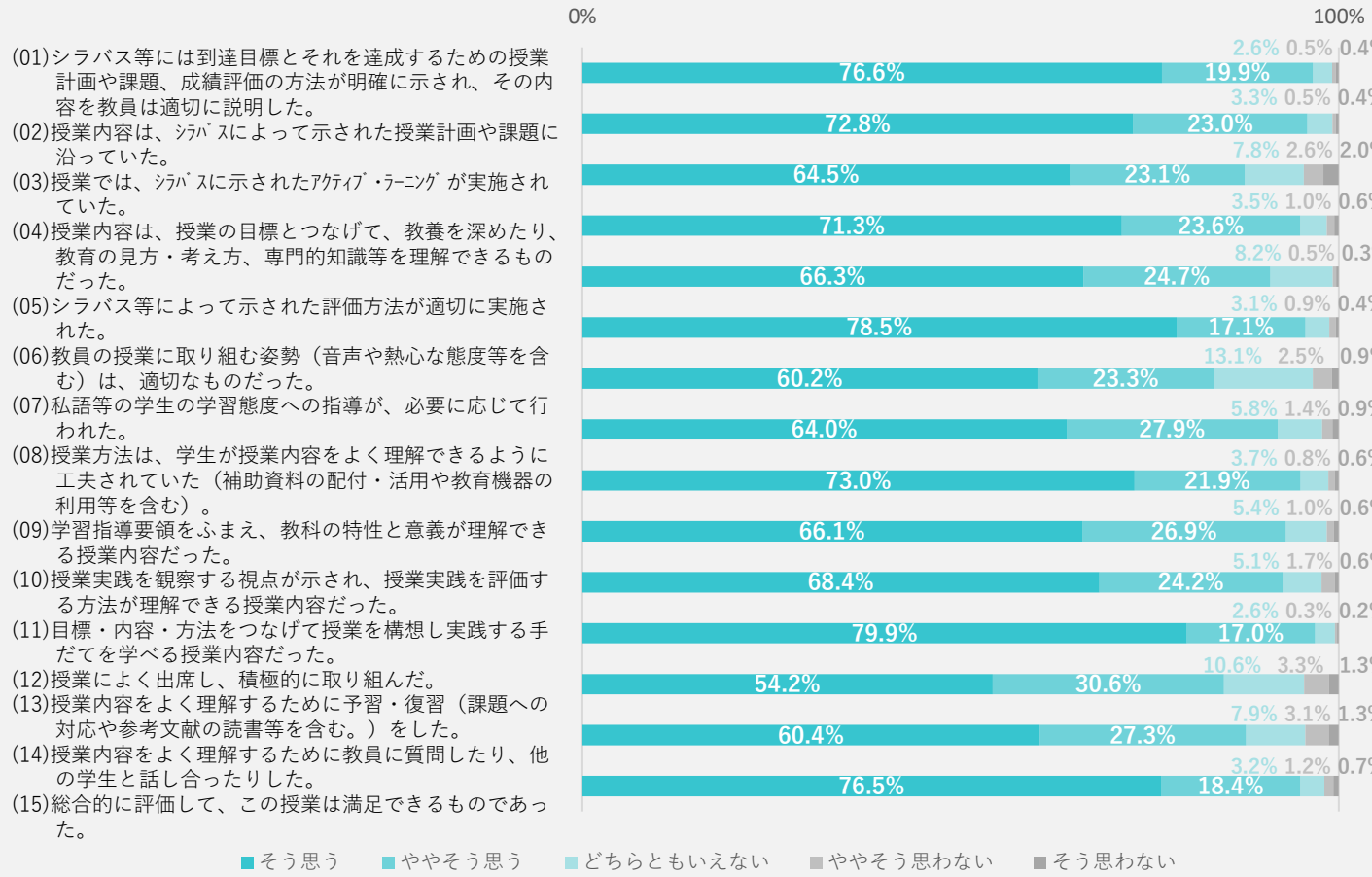
[03] 授業への取り組み・満足度について



設問(11)は「そう思う」（強い肯定的回答）が高く73.5%であった。専門職学位課程の**意義**に関わる重要な設問であり、＜遠隔＞で大学院の授業を実施する意味を強く感じるものであった。

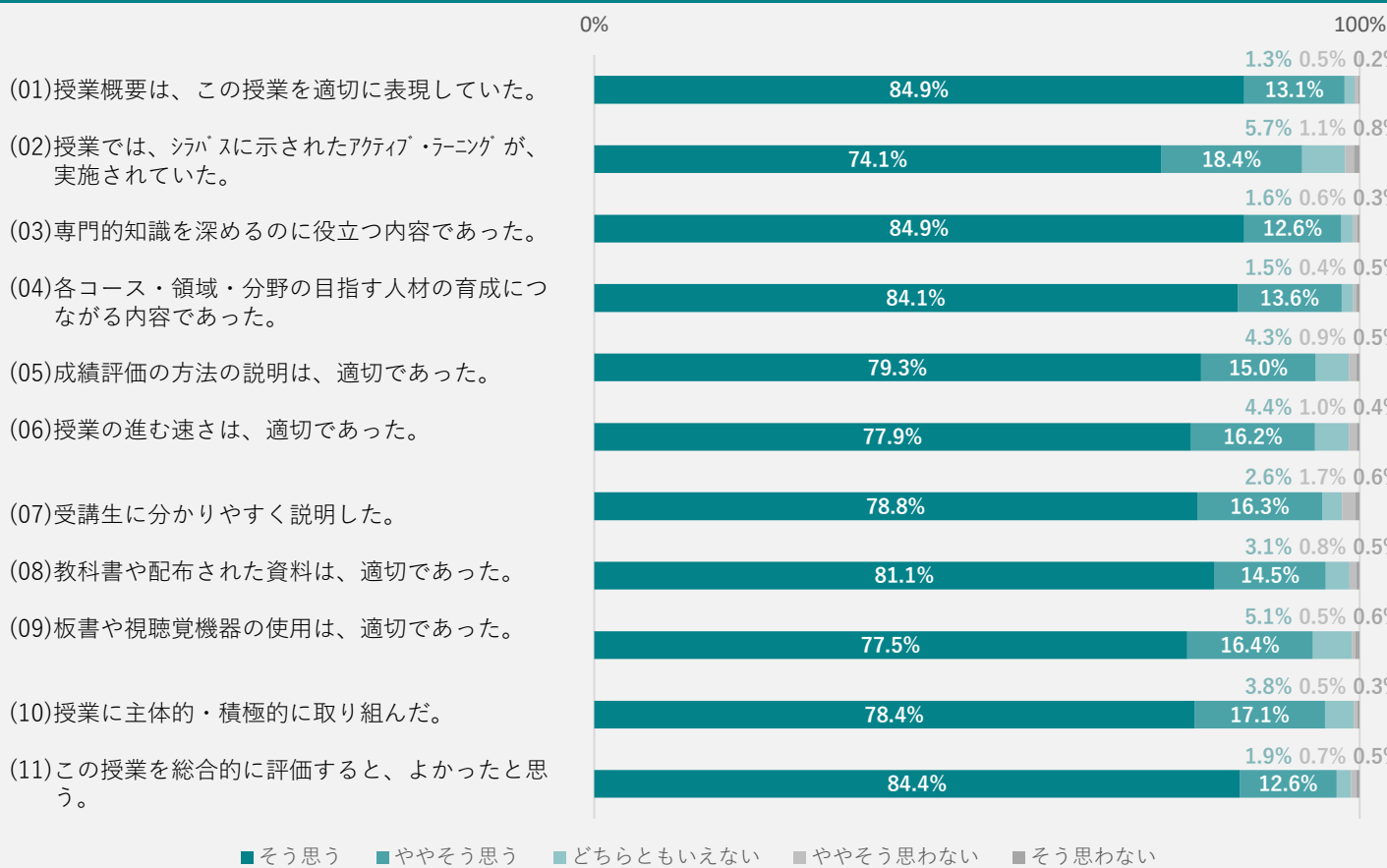
1. 学士課程

回答数：3,747件



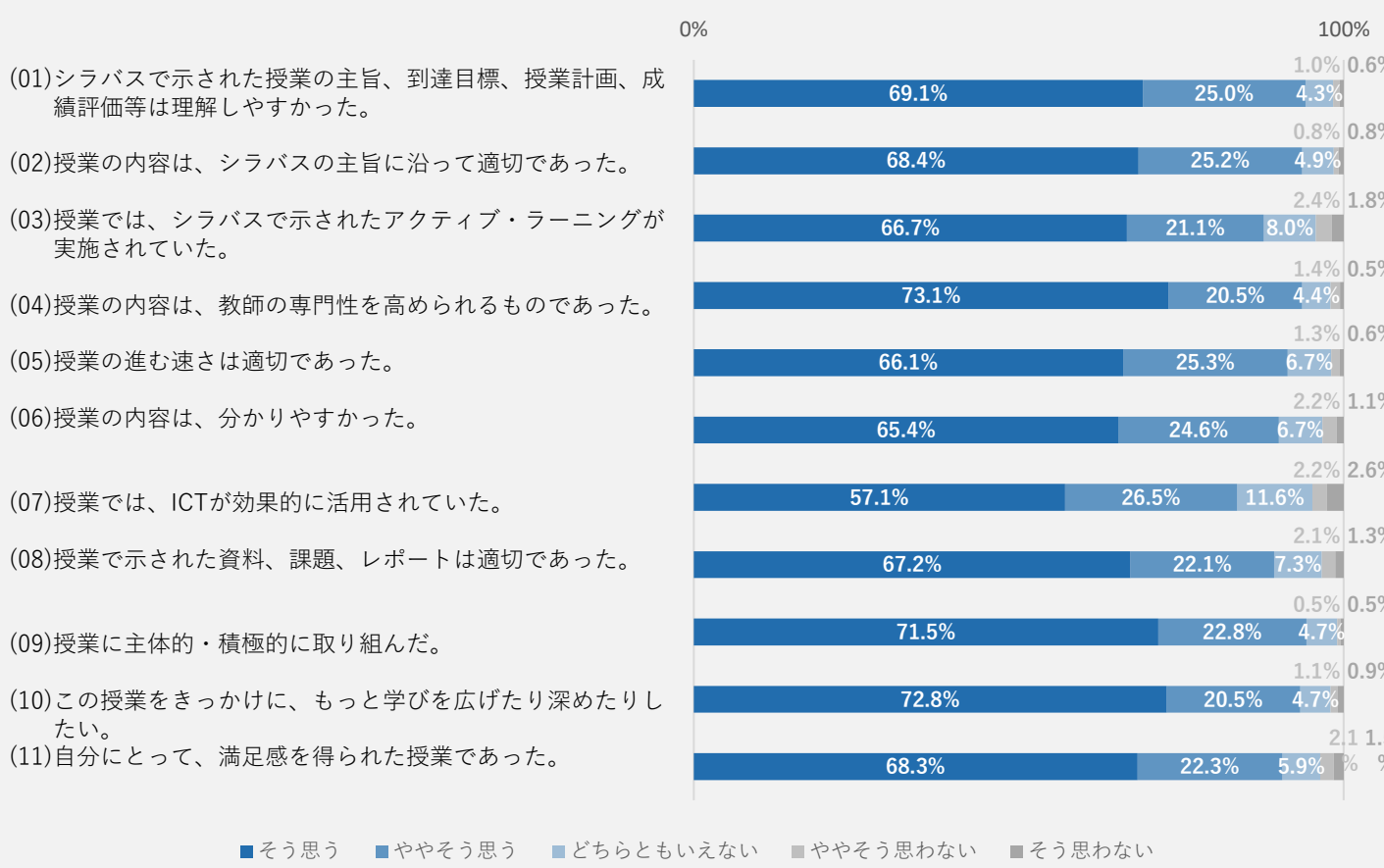
2. 修士課程

回答数：1,061件



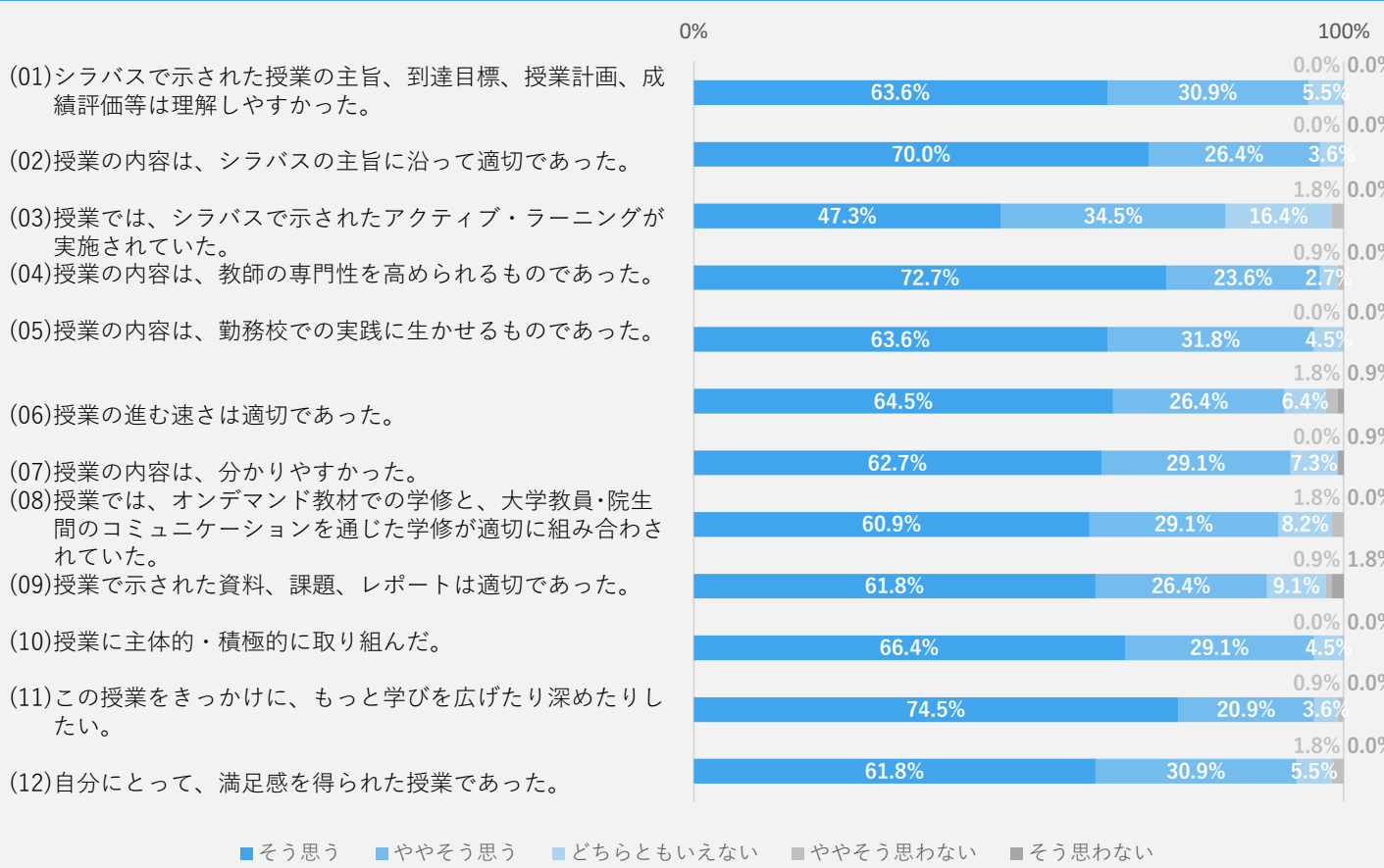
3. 専門職学位課程（通学）

回答数：1,311件



4. 専門職学位課程（遠隔）

回答数：110件



観点			(1)学校教育教員養成課程	(2)修士課程	専門職学位課程									
					(3)通学	(4)遠隔								
01	実施趣旨		「教育の内部質保証に関するガイドライン」（平成29年3月31日(独)大学改革支援・学位授与機構）、認証評価、「鳴門教育大学内部質保証方針」等において、教育プログラムが適切に行われていることを確認するための一つの方法として、学生からの意見聴取結果（授業評価等）データを活用した点検・改善が位置付けられている。											
02	回答方式		「Live Campus U」（以下LCU）（ https://lc-nue.naruto-u.ac.jp/lcu-web/ ）の「授業評価アンケート」メニュー											
03	実施手順		- 教務課からLCU連絡にて学生へ依頼 - 各授業担当教員（複数担当の場合は最終授業担当者）から授業時間等に学生へ依頼											
04	実施時期		年間6回程度 06月上旬：前期（前半）授業の最終回時期 07月下旬：前期（後半）授業の最終回時期 08月下旬：前期（集中）授業の最終回時期 11月下旬：後期（前半）授業の最終回時期 12月下旬：後期（集中）授業の最終回時期 02月中旬：後期（後半）授業の最終回時期		年間2回程度 07月：前期終了時期 02月：後期終了時期									
05	実施時間		定期試験を除く授業の最終回のうち10～15分程度		受講完了後適宜									
06	回答期間		アンケート回答依頼日から1週間程度(※LCUメニュー上は年間回答可能)											
07	対象授業		本学担当教員（嘱託講師担当科目も含む）が開設する全ての授業科目（※ただし下表の観点を含む授業科目は対象外とする。） <table border="1"><thead><tr><th>観点</th><th>対象外とする授業科目</th></tr></thead><tbody><tr><td>研究指導でありシラバス対象外科目</td><td> - 卒業研究（学校教育教員養成課程） - 課題研究（修士課程） </td></tr><tr><td>ゼミ指導の科目</td><td> - 教育実践研究（専門職学位課程） </td></tr><tr><td>実質の担当教員が本学教員ではない科目</td><td> - 履修規程における「実習」区分の科目 </td></tr></tbody></table>				観点	対象外とする授業科目	研究指導でありシラバス対象外科目	- 卒業研究（学校教育教員養成課程） - 課題研究（修士課程）	ゼミ指導の科目	教育実践研究（専門職学位課程）	実質の担当教員が本学教員ではない科目	履修規程における「実習」区分の科目
観点	対象外とする授業科目													
研究指導でありシラバス対象外科目	- 卒業研究（学校教育教員養成課程） - 課題研究（修士課程）													
ゼミ指導の科目	教育実践研究（専門職学位課程）													
実質の担当教員が本学教員ではない科目	履修規程における「実習」区分の科目													
08	アンケート項目		別紙「アンケート項目」参照											
09	アンケート結果の取扱い		- 組織的な内部質保証への活用：授業評価専門部会を設置して「授業評価報告書」（全体データ分析中心）を作成し、HP公開及び学内の内部質保証機関へ適宜提供する。 - 教員個人レベルの自己点検への活用：LCU上で、担当科目に係る学生の回答（匿名）の閲覧が可能。同メニュー機能上、教員コメントを入力することも可能。（ただし「授業評価報告書」において授業科目別の情報は表示掲載しない。）											
10	備考	...	なお、大学間連携等により他大学の教員が開設する授業科目は、別途共同的に授業評価等の内部質保証体制を構成している場合もある（例：連携教職課程科目等）ため、本件学内授業評価とは別に位置付けて整理する。											

大学院学校教育研究科教務委員会		
梅津正美	副学長	委員長
今田雄三	教授	心理臨床コース
岡崎渉	准教授	グローバル教育コース
幾田伸司	教授	国語科教育コース
森山倭成	講師	英語科教育コース
井上奈穂	准教授	社会科教育コース
山中仁	准教授	数学科教育コース
栗田高明	准教授	理科教育コース
阪東哲也	准教授	技術・工業・情報科教育コース
坂本有芳	教授	家庭科教育コース
山田啓明	教授	音楽科教育コース
山田芳明	教授	美術科教育コース
泉彩夏	講師	保健体育科教育コース
田村和之	准教授	教育探究総合コース
岡綾子	准教授	特別支援教育コース
塩路晶子	教授	幼児教育コース
大林正史	准教授	学校づくりマネジメントコース
岡田康孝	准教授	生徒指導コース
竹口幸志	准教授	学習指導力・ICT教育実践力開発コース
松浦昌宏	講師	教員養成特別コース
湯口雅史	教育実習総合支援センター所長	
富士晶次	教務課長	

学校教育学部教務委員会		
山田芳明	特命補佐	委員長
木村直子	准教授	幼児教育専修
大谷博俊	教授	特別支援教育専修
江川克弘	教授	学校教育実践コース
余郷裕次	特命教授	国語科教育コース
木口圭子	講師	英語科教育コース
眞野豊	准教授	社会科教育コース
早田透	准教授	算数科・数学科教育コース
福地里菜	准教授	理科教育コース
鉄口真理子	教授	音楽科教育コース
家崎萌	准教授	図画工作科・美術科教育コース
湯口雅史	教授	体育科・保健体育科教育コース
美井野優	講師	技術科教育コース
西川和孝	教授	家庭科教育コース
湯口雅史	教育実習総合支援センター所長	
岩寄伸浩	准教授	教育実習総合支援センター
富士晶次	教務課長	
藤原伸彦	セルフデザイン型学修支援センター所長	
梅津正美	副学長	オブザーバー
－		
－		
－		



学生による授業評価専門部会		
早田透	准教授	算数科・数学科教育コース
美井野優	講師	技術科教育コース
木村直子	准教授	幼児教育専修
今田雄三	教授	心理臨床コース
山田啓明	教授	音楽科教育コース
大林正史	准教授	学校づくりマネジメントコース

年度	月	大学院学校教育研究科教務委員会 学校教育学部教務委員会	学生による授業評価専門部会
令和5年度	4月	 各専門部会の設置	 R5第1回専門部会
	5月	 授業評価実施（前期前半分）	
	6月		
	7月	 授業評価実施（前期後半分）	
	8月		
	9月	 授業評価実施（前期集中分）	
	10月		 R5第2回専門部会
	11月	 授業評価実施（後期前半分）	
	12月		
	1月	 授業評価実施（後期集中分）	
	2月	 授業評価実施（後期後半分）	
	3月	 R5授業評価集計	 R5第3回専門部会
令和6年度	4月		
	5月		
	6月		 R6第1回専門部会
	7月		 本報告書(案)の作成
	8月		 R6第2回専門部会
	9月		
	10月	 本報告書の確定・HP公表	
	11月		
	12月		
	1月		
	2月		
	3月		

授業評価報告書 2023

発行日 2024（令和6）年10月10日

編集 鳴門教育大学大学院学校教育研究科教務委員会
鳴門教育大学学校教育学部教務委員会

発行 国立大学法人鳴門教育大学
住所 〒772-8502徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748番地
TEL 088-687-6194
URL <https://www.naruto-u.ac.jp/>